③

◆小 論 文（D類音楽）〈音楽学選修〉〔前期日程〕　東京学芸 '00

Ⅰ　次の文章は1974年に著されたものである。著者の論点を踏まえて，現在の日本における「音楽」の指す内容を概観し，それについてあなた自身の意見を述べなさい。（字数制限なし）

音楽ということばを，何の限定もなく，ただ「音楽」とだけいう場合には，洋の東西や時代と歴史の差を越えて，また芸術音楽とか，民俗音楽，大衆音楽，あるいは宗教音楽などの差を越えて，およそ音楽はすべて音楽であるはずである。バッハやモーツァルトの作品も，ロシヤ民謡も，インド音楽も，中国の京劇の音楽も，仏教音楽も，日本の三味線音楽も謡曲も，ジャズも，ロックも，さまざまなポピュラーな音楽も，その意味では，まったく同じように音楽である。もしも，このようなさまざまな音楽を，こと改めて音楽かどうかとたずねられれば，多くの人びとは，もちろん音楽だと答えるだろう。これに否定的な答をするほど勇気のある洋楽中心主義者は，さすがに今では少なくなってきた。

しかし，それでもまだ問題がなくはない。たとえば浪花節ももちろん音楽であり，日本の音楽の中でもたいへんすぐれた伝統をもつ語り物音楽のもっとも新しいジャンルである。ところが浪花節は音楽ではないと思っている人びとが，かなりいるように思う。あるとき，印刷業関係の方がたの小さな集まりで，音楽について話をした時にも，「浪花節も音楽ですか？」という質問がでた。私がすぐ「もちろんそうです」と答えたにもかかわらず，質問者はすぐには納得できなかったとみえて，「浪花節もほんとうに音楽なんですね」と念をおされた。別にこの質問者は，浪花節に対して軽蔑の気持を持ったり，何か意図をもって質問したわけではなく，まったく素朴に，日頃の疑問をそのまま出されたわけだが，それだけに同じような疑問は広く一般にあると思われる。

最近，山田流箏曲の大家で三味線の名人とうたわれている中能島欣一氏を囲んで，日本音楽の研究者たちが集まったときに，浪花節の三味線はたいへんうまいということが話題になった。この時の話の発端は津軽三味線で，青森県の田舎で発展した独特の三味線の技術に，さすがの中能島氏も舌をまいたという話だったのだが，それと並んで浪花節の三味線が，当意即妙に変化しながら，たいへんな表現力で迫ってくるということが話題となったのだった。もちろん浪花節の本領は語りにあるわけで，これが表現力ゆたかなりっぱな音楽であることに，疑問の余地はまったくない。

この浪花節のような例は少ないとしても，正面切ってこれも音楽かと聞かれれば，多くの人びとも，洋楽以外の音楽も音楽だと答えるのだが，ごく普通の日常会話や，日常的な常識的な思考の中では，ほとんど無意識のうちに，洋楽だけを思い浮かべて，「音楽」ということばを使っていることがきわめて多い。たとえば音楽会，音楽堂，音楽雑誌，音楽家，音楽評論家，音楽界，音楽教育，音楽大学，音楽運動というようなことばは，とくに現代邦楽運動などという限定詞がつかない限り洋楽という意味で「音楽」という語が使われている。

また沖縄は別だが，日本本土の多くの男の人たちは，「僕は音楽はわからない」とか「音楽は苦手だ」とか「オンチだ」などということばを，いかにもそれが当然であるかの如く，ときには誇らしげにさえ口にするのだが，そういう場合に頭の中で考えている音楽のイメージは，やはり洋楽である。浪花節や謡曲などはもちろんのこと，日本の民謡や三味線音楽や歌謡曲なども，全部除外されている。また自分の娘にピアノを習わせている人は，音楽教育をやっていると思っているだろうが，お箏を習わせている人はたいてい，音楽教育をやっているという意識をはっきり持っていない。

このように，あくまで建て前としては，音楽はすべて音楽であるということを，真っ向から否定できる人はあまり多くはないと思うが，事実上は，ほとんどの日本人は，無意識のうちに，音楽ということばを洋楽の意味に使っているのである。その意味で，日本語の音楽ということばの現実的な意味は，ひじょうに狭いものなのだ。

（小島美子著『日本の音楽を考える』より）

国・公立大学